

菊川西中だより

校長室の窓

私が教師をやめ なかった理由

(子ども達からもらったプレゼント)



今月は「私が教師をやめなかった理由」というちょっときついタイトルで書かせていただこうと思います。私はこれまでに小中高の3校種を全て経験させていただきましたが、一番多く勤務したのは中学校です。若い頃の私は俗に言う「**荒れる学校**」に何度も赴任しました。近所の人に「先生は大変な学校しか行かないんだね。」と言われたこともあります。楽しかったことより「苦しかった事」「つらかった事」の方が10倍も多かったと思います。しかし時々、子どもたちからとっても素敵なプレゼントをもらうのです。たとえばこんなことがありました。私はある学校の女子バスケット部を受け持っていました。夏の小笠大会で3年生が優勝した翌年の春休みです。優勝した卒業生に対して、2年生チームはいつも〇〇中に破れ「小笠2位」が指定席でした。春休みに入る直前に「転任」を言い渡されていた私はバスケット部の子ども達に「3月△日に〇〇中も含めて練習試合を組んだ。しかし私がもし転任する場合はこの日は次の学校に行く日だから試合は無しにするな。」これを聞いてやっぱり女の子ですね。私が転任することを敏感に感じ取り、みんなで校長室に**直談判**に行ったようです。「森田先生を替えるのを止めてください。私たち一生懸命やりますから……。」それを聞いていた事務職員の一人(**この学校は校長室の隣が事務室でした**)が、「みんな泣きそうな顔で、私は涙が出そうになりましたよ。」と私に教えてくれました。もちろんそんなことで私の転任が変わるわけありませんが、当時の校長先生の計らいで、新任校訪問日を私だけ一日ずらしてもらい、練習試合をすることが出来ました。

そして、問題の〇〇中との試合です。それまで、新人戦、練習試合を通して一回も勝ったことの無い相手に彼女たちは必死に食らいついていきます。シーソーゲームの文字通り『死闘』となったのですが、最後には自力の差が出て2ゴール差で負けてしまいました。負けた後、ふと見ると彼女たちが体育館の隅で丸くなって、しくしく泣いています。この日の夕方、帰り際にキャプテンが集合をかけ、全員が私の周りに半円を作ります。キャプテンが「私たち、先生との最後の試合だから一度も勝っていない〇〇中に勝って『一勝』を先生にプレゼントしよう」とみんなで話していました。でも負けてしまいました。すみませんでした。」と言います。

なんとなく予想はしていましたが、不覚にも涙が出そうになりました。それは彼女たちからのとてつもなく素敵な「プレゼント」でした。こんなプレゼントがくじけそうな時、私を励ましてくれます。自分の受け持った子どもたち、同じ学校の若い先生たちに「10いやなことがあっても1つのプレゼントが救ってくれる」というテーマでこの話をよくしてあげました。「子どもたちや若い先生たちの力になればいいな」という思いがあるからです。

今月末の水泳を皮切りに本年度の「中体連夏の公式戦」がスタートします。3年生は2年3ヶ月の中学校部活動に終止符を打つこととなります。菊西中の子どもたちと先生たちには、最高の思い出を作って欲しいと思っています。その思い出がきっと苦しい時の支えになってくれると思うからです。私は今でも「最後の試合」の彼女たちの顔をはっきり覚えています。 (文責 校長)